

全ての労働者は、4・4労働者集会に結集せよ!!

講演「反戦青年委員会と労働組合」講師：藤田若雄氏(東大教授)

反帝労働組合結成のために

五ケタ(一百万)以上賃上げを合言葉に、春斗はいまやたけなわである。年に一度労働組合が活動を行う春斗は一体なになのか、労働組合は年に一度賃金斗争をやるために存在するものなのか。春斗で賃上げを組合に期待できるならまだしも、最近ではますます奇妙な方向を向いている。

「ゼニをとる」ために組織された総評がおっしゃることはますますおかしくなってくる。五ケタ春斗でいっているのは何と、世界第二位の生産力に見合う賃上げを”である。即ち春斗で”とった、とった”と言っている賃上げは、実は生産性向上によってたくわえられた資本のオアマリ頂だいであり、資本にとっては用意していた定期昇給分ではないことを正直に告白しているのである。

では、その組合は春斗でなにをするのか。ストライキ体制を圧力に、団体交渉という労使協議会で一年分の賃上げ(定昇)を決めるのである。たとえストライキをやった後の妥結であつても、その翌日からはより一層のモレーツ社員ぶりを発揮して賃上げ分を生産性向上の中にすいとられてしまふのである。交渉妥結の報告にあらわれる労組幹部の笑顔とそれを聞く労組員の顔のけわしさは何を物語るのか。あ、ことしもこれだけか”とやりきれない気持を毎年のように感じている。われわれはゼニをとるために春斗を闘うのか。賃上げだけならば家でねていてもあがることはすでに経験済みである。われわれは春斗という”斗争”の中に何かを求める。家へ帰つても、遊びに出かけてもやり切れないこの現状が”斗争”の中で何かかわるかもしれないと……だが何もかわりはしない。

かつて太田黨が総評議長であつたころ「青年よハッスルせよ」とラッパをふいた。だが今日ハッスルしようとすれば資本の弾圧を恐れる前に労働組合の顔色をうかがわねばならない。今一番ハッスルしている青年労働者Ⅱ反戦青年委員会弾圧の急先鋒は他ならぬ太田黨である。われわれがなぜハッスルできないのか。それは明らかである。現在の労働組合は労働者の自主的な組織ではなく、企業に従属した従業員組織、即ち労使協議会なのである。労働者は基本的に自立している。企業がなくても労働者である。労働者は資本Ⅱ企業なくして生きられる。いやもつとすばらしい社会をきずきえることを歴史は示している。企業から自立した労働者のための組織、われわれの労働組合を作ろうではないか。言いたいことが言え、やりたいことがやれる、それがわれわれの労働組合である。全ての闘う労働者は結集し、われわれの労働組合を作りあげようではないか。

4・4労働者集会に結集せよ!

4・4労働者集会

講演「反戦青年委員会と労働組合」

— 藤田若雄氏 (東大教授) —

報告 京都労働運動研究会

とき 四月四日 午後六時

ところ 京都会馆別館集会室

(市電東山二条東入ル)